

ライノの船



プロローグ：ライノーツの船

空に浮かんだ黒い船。

人はそれをライノーツの船と呼んだ。

いつごろから現れたのか。

どうしてそのように呼ばれるようになったのか。

誰も知らない。

今日も赤い鳥が笑い声を上げ、

NHK3号は誰に届くとも知れぬ電波を発し続ける。

風が凧いだ。

砂漠に生えた海シャボテンがゆっくりとした動きを止める。

風の中を泳いでいた羊たちが戸惑った様子で足をジタバタとさせている。

これも形態変異の予兆であろう。

ライノーツの船は帯電を増して風の流れに影響を与えている。

即席ラーメンをすすりながら、今日も空に浮かぶ船を見上げ続ける。観測者の家に長男として生まれた俺が何の疑問も抱かずに続けている仕事の一つだ。少なくとも仕事を始めてからは何の疑問も抱いていない。淡々と仕事をしていれば村では食うには困らないし、様々な発見があって面白い仕事でもある。

観測者である俺の仕事は村周辺で発生する様々な現象を観測、記録、整理、解釈する事だ。

村はかつて放送センターと呼ばれていた高層建築物の1125階にあるとされている。あるとされているというのは実際に確かめる術が無いからである。下は35階層下までは降りられるのだがそれより下に下りる階段や昇降装置の類は未だ発見されていない。記録によれば今より3世代前に40階下まで降りたと言う記録もあるが現在ではその道も閉ざされてしまっている。また上層にも2階上までしか到達できないでいる。階層を表示するといわれている村の広場の電磁計には1125という数を示しており、今のところそれを信じるしかないのである。

「どんな感じですか。ゲルモ」

村長が背後に立っていた。正確には立っているという表現は適切とはいえない。村長は宙に浮いている。

宙に浮いた村長は河馬の姿をしている。本物の河馬など見たことが無いから果たして村長の姿が本当に河馬なのか俺にはわからない。最も長命でこの近辺の階層ではもっとも大きな情報量を持つ村長がそう言っているのだから信じないわけにはいかない。少なくとも灰色で四つんばいの巨体は人間のそれではない。

村長は情報のやり取りを手短に済ませるために電気触手を伸ばして私の末端神経端末に接続した。

我々の階層の空に現れたライノーツの船に関する情報だった。ここ最近、年に一度の形態変異の予兆が見られるのだが、他の階層の観測者たちが伝えることによるとその形態変異に関連して様々な情報が観測されているとの事だった。

ライノーツの船には各階層を繋ぐ入り口がある。その入り口は様々で階段や昇降装置、洞窟、竜の口などが見られる。上階の手牟族の観測者によれば階層の骨格をなす地竜が動き出す兆しが見られ、1112階層の観測者によれば階層をつなぐ昇降装置の歪みが見られ消失する可能性が見られるそうだ。

それはつまり十数年に一度の階層再編が発生する可能性が見られるというのだ。

階層再編とは文字通りこの建築物内の階層が再編されると言う事だ。階層をつなぐ道が閉ざされ、階層は移動を開始する。階層は位置を変えて新たな階層と繋がるのだ。階層再編には現在

までに法則のようなものが発見されておらず、完全にランダムに再編されると言われている。また、再編に際しては必ずしも全ての階層が移動するわけではない。そのため数世代にわたって交流を持ち続けている階層も存在する。

またこの階層1125階は特殊な階層であるらしく、周りの階層が移動しているばかりでこの階層自体は全く移動していないらしかった。広場に表示される階層表示は過去の文献をあたって見ても変化したと言う記述は見られない。少なくとも広場の階層表示を信じる限りにおいては我々の階層は固定されたままである。

俺は各階層で起こっている現象に対して解釈を与え、もし階層再編が発生するという解釈が導き出された場合について何らかの建設的な意見を村長に言語系情報で提出しなければならない。建設的な意見。そうは言っても観測者として出来る事はできるだけ早い段階において階層再編の時期を予測し、各階層の人間に注意を喚起することだけだ。そんなあまり建設的ではない情報を俺としては音声言語系情報による伝達を採りたいのだが、村長は余りそれを好ましく思っていない。

「私は口下手でね。そもそも喋るための構造の喉を持っていないのですよ」

村長はのんびりとした声でそう答える。その声は喉から発しているかのように聞こえるが、実際は尻尾の微細な振動によって形成されたものであるらしかった。

村長は俺の横に座り、空を舞うようにして飛んでいる羊たちをぼんやりと見詰めている。羊たちは不確定な情報を纏い、奇妙な呪文をぶつぶつと呟いている。階層再編の影響か今年の羊の情報の質は例年に比べ悪いようである。もう少し遊泳を続けさせ情報収集を続けさせればわからないのだが、今年はそうも言っていられない。

「不本意ながら収穫を早めなければ成らないかもしれないですね」

何処からとも無く取り出した鉄火巻きを頬張りながら、羊たちの数を数えている。村長曰く、鉄火巻きは武器にも物干し竿にもなるというのだが食べ物としての機能以外は目にしたことが無い。かつての階層再編の際には侵略系種族と隣り合っしまい、その折に村長は鉄火巻きを手には戦ったと豪語するのだが全く怪しいものである。

今回村長によって与えられた情報を分析する限り、階層再編は割かし近い時期に発生する事が予測される。観測者としてはふがない事だが俺は全く予測できていなかった。しかも、今回の階層再編はいつもの再編とは少々問題の大きさが違っている。それは一階層上の手牟族に階層移動の傾向が見られるということだ。手牟族とは5世代前からの交流があるが今回の再編によってその交流は断たれるであろう。手牟族との長い交流からお互いの構成要因は入り混じり、友人・親戚あるいは婚姻関係にある場合もある。それが、断絶されるのである。今までこのような断絶が無かったわけではないが、今回はあまりにもそれに関わる人間が多い。どちらの階層に残るのかそれが今回は大きな問題が伴っている。完全にランダムに再編が行われるといわれ、再び手牟族の階層と結ばれる可能性があるのだが過去の文献を探索する限りはその確率は限りなく低い。つまり2つの階層の間で暮らしてきた人々が残りの人生をどちらの階層で過ごすのか、どの人とともに暮らし、どの人と別れるのか、それを決断しなければならない。

羊を数えている内に村長は眠ってしまっていたようだ。すやすやと寝息をたてているのだがその

顔が河馬であるから穏やかな寝顔とは言い難い。けれども、村長の寝顔を見ていると何だか安心した気分になる。

俺にできることは何も無いのだ。

彼らがどのような決断を下すのかは俺にはわからない。

だけど――

俺はまた空に浮かぶライノーツの船に目を向けた。

2 : ケムリ

青年は走っていた。

ずぶ濡れになりながらも竜骨でできた階段を駆け上がってゆく。

足の疲労は痛みを通り越して感覚が失われるまでに至っていた。

赤い鳥が青年を嘲笑している。

嘲笑を振り払うかのように青年は走り続けた。

青年の名はケムリと言った。

ケムリは1125階層に住む5番報道者GdNAの息子である。ケムリはGdNAにとって自慢の息子であった。父の仕事を継ぐために日夜修行に励み、基礎的な技術のほとんどを習得し父が病に倒れた時などには代わりに仕事を任されるほどだった。

全てがうまくいっていた。

日々の仕事や生活に何の疑問も抱くことなど無いぐらい問題など起きなかった。

しかし、恐れていた事が起きてしまった。本当は恐れてなどいなかったのかもしれない。頭の片隅にはあったもののそれが現実目の前に現れてくるなど想像もしていなかった。

想像など、したくは無かった。

もう一度、あんな事が起きるなんて。

階層再編。

そして、ケムリの属するコミュニティと手牟族との交流の断絶。

「一緒に来ないか」

その言葉には小さな希望が込められていた。

言葉をかけられた手牟族の少女の顔には戸惑いが浮かび、直ぐに悲しみへと変わっていった。

小さな希望は、萎んで消えた。

はじめから心のどこかでわかっていた。彼女がイエスと答えるはずが無いと。

「FAM」

ケムリは彼女の名を口にした。そうもしないと彼女の存在から己の眼前から消失してしまいそうな気がした。せめて、今は、今だけは彼女を失いたくは無かった。

FAMは黙ったままうつむいた。これ以上ケムリの目を見ていることができなかったのだ。

FAMの母は今ベッドの中で眠っているだろう。数年前に重病を患った母はもう立ち上がる事さえできなくなっていた。たった一人の家族である母を、病床に伏した母を置いていくことなどFAMには考えられない事だった。

そんな彼女にケムリは言葉をかけてやることができなかった。

さよならは言わなかった。

何度かその言葉が喉まで上ってきたのに、それが言葉となる事はなかった。

あの時もそうだ。

昇降装置の中に立つ母と姉を目の前にしてケムリは別れの言葉を継げることができなかった。

ただ、父と母の顔を交互に見詰めるだけだった。どうして母や姉と別れなければならないのか。それがどうしてもわからなかった。

よくよく考えてみればその別れの後、草原でひとりで泣いていた時に一生懸命慰めてくれたのもFAMだった。丁度そのころに彼女は父親を失っていたのだが、それでも彼女自身の悲しみを押し隠してケムリを慰めようとしていたのだ。

ケムリの思い出の中にはいつもFAMがいた。一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に……。思い出しても思い出しきれないほどの思い出が走馬灯のように浮かんで消えてゆく。

恋人と言う言葉は陳腐にすら聞こえる。兄妹、家族、いや、ケムリにとってFAMはそれ以上だった。

これが彼女と会うのは最後になるというのにケムリは何もいえなかった。

彼女の悲しみを和らげる事も、わかりきった結末を告げることもできなかった。

彼女もまた何も言葉を発することが無いまま俯いたままだった。

こうしていれば決定的な破局を避けられるような気がした。少なくとも先延ばしにできるような気がした。もしかしたら階層再編など起こらないかもしれない。

そう思わずにはいられなかった。

そんな淡い希望は結局は打ち砕かれてしまう事は、たった今学んだはずなのに。

「おかえり」

いつものようにGUNAは息子に目を向けることも無くそう言った。ケムリはそんな寡黙で仕事人間の父を尊敬していた。

だから父や父から継ぐべき仕事を置いてこの階層から去るなど考えられない事だった。少なくとも、今までは。

ケムリが夕食の支度を終わるとGUNAは一先ず仕事を切り上げてテーブルに着いた。

家は報道装置NHK3号に隣接している。電波情報の発信装置であるNHKは全部で3つあり、それらは6つの報道者の家系によって代々守られてきている。GUNAはNHK3号を挟んで反対側に住む6番報道者の丸目と共同でNHK3号を管理している。もともとNHK3号は娯楽系電波情報を発進するものだったと言われているが現在ではその役割は失われ、他のNHKと同じ様な情報を発している。そもそもNHKとはそれら情報の報道に関与する機関に与えられた名称であったと言われており、この階層自体がその機関の一部であったとも言われている。そしてこの階層の住民たちは何らかの報道に関与するような役職を持った人々の子孫である言い伝えられているのである。

NHKは交流の断絶した階層に情報を発信する装置である。他の階層にもそう言った放送装置を持った領域が存在するが、この階層には受信装置が無い。一方的な放送しかないのだ。各階層には様々な放送装置に対応する受信装置が置かれている場合が多いのだが、現在交流のある階層にはNHK受信装置しか配置されておらず、相互の情報交換のようなことはここ数世代行われていない。今回の階層再編においてその情報交換が復活するのではないかという期待を抱いているものもあり、とりわけ報道者の間では再編を待ち望む声も多い。

ケムリが何も言わずともG♫NAは食卓やってくる。ずっと二人だけで暮らしてきて出来上がった親子の阿吽の呼吸のようなものである。果たしてこの父は今回の階層再編についてどう思っているのだろうかとかケムリは考える。ケムリは父の考えている事がいまだにわからなかった。

「どうだった」

ケムリが何も言わずとも父はFAMとの事を知っているようだった。仕事以外でケムリのやる事には全く無関心そうに見えるのだが、実際はそうでもなかった。ケムリの事を気にかけて心配しているのだ。口数が少ないためにそれが伝わりにくいのだが、ケムリにはそれが十分すぎるほどに伝わってきていた。けれども、FAMのことについて父がどのように考えているのか、そこまで推し量る事はできないでいた。

「……」

ケムリが黙っていると、G♫NAは察したようでそれ以上何も聞かなかった。

食卓ではケムリが一方向的に話すことが多い。だから、ケムリが黙ってしまった夕食は静かなものだった。しかし、今日は珍しくG♫NAの方から話しかけてきた。

「忘れるには時間はかかるかもしれない。だが、また新しい恋人はできるさ」

G♫NAはG♫NAなりに気を使っているのかもしれない。言葉の下手なG♫NAにとってそれが精一杯の慰めの言葉だったのかもしれない。しかしケムリにとってそんな慰めは場違いなもの意外には感じられなかった。

「新しい恋人なんて……」

「今は、彼女だけしか見えないかもしれない。お前はまだ若いんだ。いくらでも見つけられるさ」

G♫NAはから回りしていた。G♫NAはG♫NAなりに息子を理解しているつもりだったのだが、結局それは父親の立場から見たそれではなかった。息子の視点に立って息子を理解してやるなどと言う器用な芸当はこの男にはできぬ相談だった。

「父さんはそんな風に考えるから、母さんとも別れられたの」

ケムリは完全に父親を敵視し始めていた。

FAMとの事を若者の恋愛ごっこだとしか見ていない。ケムリにとってはそれ以上の存在であるのに、何も知らない父親にそんなことを言われるのが心外でならなかった。

尊敬しているはずの父親でも、何故だか憎くて仕方なかった。FAMとの別れと言う衝撃とそれに伴う動揺がケムリの歯止めを緩めてしまったのかもしれない。

だから、父親の顔に苦痛の色が浮かび上がっている事にも気づくことができなかった。

「違う。父さんには大事な仕事が……」

「父さんはいつも仕事ばかりだよ。そんな仕事が大事だから、母さんとも別れられたんだ。母さんより、仕事が大事だったんだ」

ケムリの母でありG♫NAの妻は他階層の巫女だった。巫女はその階層に置いて村の祭祀をつかさどり村の未来を占う重要な役割を持っていた。G♫NAと巫女は周囲のの反対を押し切り結婚した。大恋愛だった。

しかし、決定的な瞬間は確実に訪れようとしていた。

そして階層再編はやってきた。

村の階層へ通じる昇降装置に次元の歪みが生じたとき、2人の中には2人の子供がいた。ケムリとその姉である。

予めそうなる事は予想されていたのに、2人はそれを考えようとはしていなかった。

そして、いざその時が訪れたときには二人にはもうどうする事もできなかった。

G_αNAは妻と子連れ出そうとしたが村人たちに四六時中見張られており、逃げ出すことなどかなわなかった。

G_αNAが村に残ると言う選択肢もあったかもしれない。

だが、G_αNAもまた代々受け継いできた報道者の仕事を己の代で終わらせるだけの勇気は無かった。

別れ。

ケムリは父の元へ残り、姉は母とともに去った。

そのときを境にG_αNAの生活は息子と仕事だけになった。息子を立派に育て上げ、そして己の仕事を完遂する事がせめてもの償いであるような気がした。

それができなければ、妻と別れた意味が失われてしまう。

G_αNAの人生が無意味なものになってしまう。

「お前は、何もわかっていないんだ」

苦し紛れの反論。反論にもなっていない。

「わかんないよ。そんなの、わかりたくもないよ」

そうやってケムリは食事も残したまま、外へと飛び出した。扉を閉める直前に見た父の姿は、とても小さかった。

憧れていた父親の姿がどれもちっぽけなものに思えてきた。

ケムリは将来父のようになることを考えてきたが、今ではそれがとても嫌だった。

仕事だけの寂しい一生。

そんな風にはなりたくない。

俺は、父のように成りたくない。

曇り空。

粘着質の雨が大地を濡らしていた。

鬱々として息苦しい空気が肺の中へと入り込み、血に溶け込むまいと肺の壁にへばりつく。

それでも青年は走り出す。

FAM。

今行くよ。

ケムリはFAMと共に暮らすことを決意した。

こんな誰に届くとも知れない電波を発し続ける機械と共に一生を終えるのは勘弁だ。

残された時間は僅かだった。間もなく階層再編が起きる。

急がなければ。

ケムリは雨で柔らかくなった地面に足を取られながらも必死に走った。

空気は重く、冷たい雨がケムリの体力を奪っていく。

暗鬱とした空がケムリの視界を歪ませる。

上階とを繋ぐ竜骨の階段に着いたときにはケムリは肩で息をするほどだった。だが、あまり休んでいる暇は無い。

階段はどこまでも伸び、雲を突き抜けていた。

いつも上っていた階段が、今日は見慣れない異様なものに思えた。もう階層再編は終わってしまってどこか異世界に通じる階段と化してしまったのではないだろうか。そんな不安がケムリの頭を過ぎる。

それでも行くしかなかった。

FAMと会うためにはこの階段を上るしかないのだ。

赤い鳥達が笑っている。

疲れきったケムリをあざ笑っている。

馬鹿なことをするもんだ。

正気の沙汰とは思えないぜ。

「ケムリ」

鳥達の声に混じって、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「父さん？」

竜骨の階段の一番上、地竜の口の前に人影が見えた。

それは間違いなく、父の姿だった。

「仕事は？」

何故だか、そんな言葉が出た。そんな事は今言うべきことではないのに。

「さぼった」

GUNAは笑ってそう答えた。そんなGUNAの姿は最後に見た小さな父親の姿ではなかった。どこか吹っ切れたような、そしてケムリが尊敬してきた父親の姿だった。

GUNAが仕事を休む事など滅多に無かった。たとえ高熱が出ても仕事を続けるような男だ。しかも、今日は階層再編が起こるという重要な日なのだ。にもかかわらずGUNAはケムリの目の前にいた。

「どうして、わかったの」

「わかるさ。俺の息子だからな」

ケムリははっとした。ケムリは何も言わずに家を抜け出してきたのだ。何の別れの言葉も述べぬまま。

それがどれだけ大変な事か、どれだけ父を悲しませる事になるか、考えもしなかった。

己の愚かさに、ケムリは何も言う事ができなかった。

父に会ってケムリの心に心に疑念が差し込んだ。このまま行って良いのだろうか。これまで育ててくれた父を裏切って、何の恩返しもできないままに。

それが己にとって最良の選択なのだろうか？

FAMを愛しているが、父の事もまた愛している。

ケムリは昨夜の父親の言葉を思い出していた。まだ、自分は若いのだ。確かに、また恋人が見つかるかもしれない。けれど、父にはもう自分しかいないのだ。それを失ってしまうと言うのはどれ程悲しいことなのだろう。

けれど、FAMを失う事も考えられなかった。一度は決意したはずの事なのに、もうそれは何かの過ちだったようにしか思えなくなっていた。

選べない。

「行け」

ケムリは耳を疑った。今、父はなんと言ったのだろう。果たしてそれは本当に父の言った事だったのか？

ケムリはGdNAの顔を見上げる。

そこにはいつもと変わらぬ父がいた。

「だが、後悔だけはするな。絶対にするな」

ケムリはただ頷くしかなかった。GdNAの言葉を一言も聞き逃すまいと耳を傾け、GdNAの姿をしっかりと焼き付けようと目を見開いた。

「父さんも一緒に……」

「駄目だ」

答えは最初からわかっていた。けれども、そう言わずにはいられなかった。

GdNAは人生を後悔するわけには行かなかった。妻と別れた事を後悔するわけには行かなかった。

妻との約束した事。

仕事をやり遂げ、そして息子を幸せにする事。

「お前のような息子を持てて俺は幸せだよ」

「俺も……父さんが父さんで良かった」

頬を濡らす液体が雨なのか涙なのか。

「俺、父さんの声、聞くよ」

「ああ」

NHK三号の発する電波は、ケムリの下へ届くだろう。

それは決して返事を出す事のできない手紙だけれど、それでもGdNAはケムリの存在を感じるだろう。

父と息子の絆があるから。

「ありがとう。父さん」

「ああ、元気でな」

地竜の口の中へと入っていったケムリの姿が次第に薄れていく。

ケムリの笑顔がぼんやりとして、やがて消えていった。

完全に上層とを結ぶ扉が消え去ってもGdNAはそれを見続けた。

まるでそこにまだ息子がいるかのように。

「何だ？そのサイコロ」

ゲルモは私が手の中で転がしていた2つのダイスを不思議そうに見詰めている。ダイスは黒褐色の輝きを放ち、私の掌中で出口を探す小動物のように右往左往している。

「行き先を決めるダイスだよ」

「は？意味わからんけど」

ゲルモは笑いながら私の手の中からダイスを一つつまむ。黒アスペルギルスの骨で作られたと言われているダイスは6つの面に不思議な記号が刻まれている。遙か古代に使われていた数字だって言う奴もいるけど、私にはそれが数を表すのに相応しい形をしているとは思えない。

「このダイスと表を使って行き先を決めるの。2つのダイスを転がして、それで出たダイスの記号の組み合わせを表と照らし合わせて、再編のときに留まる階層を決めるんだってさ」

「そっか。お前旅行者の一族だもんな」

ゲルモは納得したように頷いてみせると、グラスに残った絞酒を飲み干した。

「で、何でお前がそれ持ってんの？」

私の一族・大東亜開拓会は代々階層再編のさいにダイスをふって行き先を決める。代々そうやって一族全体が旅を続けてきたのだ。そして今回はその役目が、私に与えられた。

「名誉の大役を与えられたってわけよ」

「ありえねえ。お前が？」

「文句あんのかよ」

わざとらしく腕を振り上げると、ゲルモはおお怖っと小さく言い怯えるふりをした。

「そっか。じゃあ、お前ともお別れか」

ゲルモは寂しそうに杯に酒を注ぐ。

「まだ決まったわけじゃないけどね。下手したらここに残るような組み合わせになるかも」

「じゃあ、試しに振ってみようぜ」

ゲルモがダイスを一つ手に取り、もう一つは私の手の中に。

ゲルモと私は昔からの親友だった。一緒に遊ぶようになってからもう7年は経つ。

暇を見つけては一緒になって遊んだり、悪さをする。

親に話せないようなこともゲルモには話せた。

たとえ何も言わなくても、ゲルモならわかってくれるような気がした。

かけがえの無い、大親友だ。

行き先は、第1121階層だった。

「え、行くの？」

妹のさきめはさも驚いたかのように大きな眼で私を見つめる。

「悪い？」

「そりゃ、姉ちゃんと分かれずにすむって言うのは嬉しいけどさ。てっきり、ゲルモと残るもん

だと思ってたけどなあ」

さきめは納得がいかない様子でわざとらしく首をかしげている。

いくらゲルモとは恋人じゃなくて友達だって言っても、周りの人間はそうは思っていないようだった。良いなあ素敵な恋人がいて。熱いわねえ。まだ結婚しないの？そんな的外れな冷やかしゃ期待が私たちの周りにはあった。

私は何で私たちをそんな目で見るとか理解できなくて不満そうな顔をするのだけど、そんなときは決まってゲルモがこう言うのだ。

「いっそ本当に付き合っちゃおうか」

1125階層の下への出口、天の架け橋でゲルモは待っていた。

無駄に気を使った族長の銀二が「お前は後で来い」と言って私を残して行ってしまった。

銀二はもしかしたら、ここでゲルモが私を引き止めてそのまま結婚してここに留まるだろうなんて考えているのかもしれない。

ほんと、いらぬ気遣いだ。

ゲルモとは親友であって、恋人なんかじゃないんだから。

恋愛って言うのはちょっとした勘違いや、思い込みから始まるんだと思う。ああ、この人のことが好きかもしれないって言うそういう勘違いが段々と大きくなって、それが好きだっていう恋愛感情になっていくんだと思う。

でも、ゲルモとはそうはならなかったし、そんな事は考えられない。

好きかもって思ったことはあるかもしれないけど、そんな小さな勘違いは直ぐに打ち消した。

有り得ないよ。親友との恋愛なんて。

そんな感じ。

そういう意味じゃ親友って言うのはかえって邪魔になるのかもしれない。今の、この最高の関係を壊したくないって思っちゃうから。

でも、別に後悔してるわけじゃない。

やっぱりゲルモは最高の友達だし、恋人になりたいなんて思わない。

それでも、もしかしたらゲルモのことを好きだって勘違いして、恋人になっていた可能性もあることは否定できないよ。この今とは違う今。さよならなんて無くて、ずっと一緒にいようって言う別の形の今。

ゲルモとは別れたくない。

それはもちろん恋愛的な好きって言うのとは違って、大切な、親友だから。

だけど、親友は別れても親友だ。

別れたら、もう直す事のできない恋人とは違う。

親友との別れは新たな旅路で、そんな親友の旅路を祝ってやるものだ。

親友との別れに涙は似合わない。

笑って分かれよう。

涙涙のお別れなんかじゃない。

急展開の愛の告白なんてものもない。

清々しい、親友との別れだ。

「またね」

さよならは言わない。

「また、か・・・そうだな」

ゲルモも笑って、答えてくれる。

「また、会おう」

私たちはずっと、ずっと友達だ。

4：村長

あなたが私の前からいなくなって、もうどれくらい経つのでしょうか。
あなたが最後に私の頭を撫でてくれてから、何度あなたの姿を錯覚したでしょう。
あなたは再会の約束をしたことを今でも覚えているのでしょうか。
あなたはまだ私のことを思ってくれているのでしょうか。
私は、あなたのことを忘れてはいません。
どれだけの歳月がすぎようとも、あなたの事だけは忘れる事はできません。
だからこそ、私は生きています。
私はあなたに会うために生きています。
それだけが私の生きる意味。
あなたを信じて、あなたにきっと会えると信じて私は今日まで生きてきました。
幾度も繰り返される階層再編。
私はその度に、希望と失望を味わいます。
あなたに会えるかもしれない。
でも、あなたは現れることは無かった。
だけど、次こそは会えるかもしれない。そう思って、あなたを待ち続けています。
そうそう、あなたは鉄火巻きが大好きでしたね。
だから私は鉄火巻きを作り続けています。
まだ、あなたほどうまくは作れないけれどあなたに喜んでもらえるように頑張っています。
私はあなたに会うためにこんな姿になってしまいました。
あなたがいつまで経っても現れないから、私はこんな姿に成らなければなりませんでした。
河馬です。
あなたが好きだと言っていた、壁画に書かれた動物の姿です。
たとえ人の形でなくなっても、あなたに好きでいてもらえるように。
こんな姿でも、あなたは私だと気付いてくれますか。
こんな姿でも、あなたは私を愛してくれますか。
あの頃のように私の頭を撫でてくれますか。
私は不老不死になってしまいました。
だから私はいつまでも待ち続けます。
でも、今度こそはあなたに会えるような気がしてならないのです。
だから私は今日もライノーツの船を見上げます。

草原に立つ寂れた掘建て小屋。

屋根の上に乗った風見鶏が出鱈目な方向を指したかと思えば、風も風見鶏に合わせる様に風向きを変える。

小屋の中には異様な機械が低い唸りを上げながらもノイズ混じりの声を受信している。

NHK3号から発せられた電波。

何処へ行くとも無く彷徨った電波はやがてこの受信装置へとたどり着く。

声は電波に変わり、電波は声へと戻る。

一人の少年が受信機の前に立っていた。

少年は受信機から流れてくる老いた声に耳を傾ける。

物心がついた頃に父から教えられた。

この声は祖父の声なのだ。

少年はまだ見ぬ祖父の声を聞く。

少年の祖父は少年のことを知らない。少年は祖父と会うことも、何らかの手段で交流を持つこともできなかった。

ただ、祖父の声を聞くことしかできない。

だがそれでも、祖父の声を聞き続ければいつかは気付いてもらえるような気がした。

空には何も浮かんでいない。

黒い船も、情報を喰らう羊も。

ただ、見えない声が空を飛んでいて、やがて受信機へとたどり着く。

NHK3号は誰に届くとも知れぬ電波を発し続け、そして誰かがその電波を受け取る事になるだろう

。

了

おまけ1：キース

木目調のテーブルが脂ぎった光を放っている。天井で輝く電灯はニコチンがまとわりつき本来の力は失われてしまった。

換気扇がうまく廻っていないためか店内の空気は重苦しく、視界もどこかぼやけている。

キース・ポア・ヴァンガードはそんな寂れた店の雰囲気が好きだった。

キースは小奇麗な飲食店があまり好きではなかった。顔の見えぬ調理人。機械的な対応の受付員。

そこには客と店との距離がある。客は客でしかなく、一人の人間としてみるようなことは無いのだ。

そんな疎外感キースの好む所ではなかった。そんな場所に比べれば、お世辞にも綺麗だとは言えないようなこんな場所の方がよっぽどましだった。確かに飲食店にとって清潔であるという事は必要なかもしれないが、度がすぎればあまりにも無機質すぎて食欲がうせる。

そして何より、キースは飯を食いながらそれを作った人間と話をするのが好きだった。

「お待ちどうさま」

店主のアンディ・ザ・シューティングウルフが笑顔で「こってり大盛豚骨ラーメン」をキースの目の前に置く。豚骨スープの香り、そしてその中に溶け込んだ麺の放つ芳香がキースの鼻腔をくすぐった。

唾液が口の中に充満し、胃は準備万全であることを主張している。

割り箸を綺麗に割ると、それを横に置かずはレンゲで様々なエキスの混じった大海の中からスープを掬い上げる。湯気をゆっくりと吸い込み、香りの中の味を存分に堪能すると暖かなスープを口に拭くむ。

こってりとした油の味が口の中にまとわりつく。濃厚な味の中にも、出汁の繊細で絶妙な味が失われていない。出汁はおそらく豚骨をベースに赤烏のがら、イガ茸や火野菜などを煮込んだものだろう。それらがうまく溶け込みながらもそれぞれの特徴を絶好のタイミングで舌に己を主張する。

「うまい」

自然とそんな言葉が口から漏れた。キースはそんな言葉を言おうと思ったわけでもないのに意識には反して言葉が出てしまった。改めて考えてみても、それ以外に思いつく言葉はない。

うまい。

舌に残る後味を堪能しながら、キースは心のなかで感想を述べた。

「ありがとうございます」

アンディはニコニコしながらキースの食べる様子を眺めていた。キース以外に客はいない。

飛びっきりうまいラーメンを作る店なのに、ここに来る客は案外少ない。キースにとって最高の穴場だ。

「あんたが一番、俺のラーメンをうまそうに喰ってくれる」

アンディはそんなことを言った事がある。キースにとってアンディは最高のラーメンを作る男で

あるように、アンディにとってキースは最高にうまそうにラーメンを食う男だった。

スープを味わった後は、麺に取り掛かる。スープが絡みつき黄金に輝く縮れ太麺はうまい具合に味を纏っている。歯ごたえ、舌触り、そして喉越しの全てが完璧といえるほどに調和している。流れるが如く口の中へと入り込み、歯に抵抗して見せたかと思えば丁度良い具合に噛み切れ、喉を通るころになってもその活力は失わずに心地良い感覚を置き土産とばかりに残してくれる。うまい。

キースにはそれ以外の言葉を見つけることができなかった。脳は幸福で満たされ、ラーメンの中へと溶けていきたいとさえ思えた。

「やっぱり、うまいなあ」

「誉めても何も出ませんよ」

アンディははにかんで照れを隠すように禿げ上がった頭をかく。

「早く食べないと麺が伸びちまいますよ」

確かにラーメンは早く食べなければ麺が伸びてその味を損なってしまふ。しかし、キースはこのラーメンを食べ終えてしまふのが何だかもったいなかった。

最後の一杯。

そう心に決めて、キースは今日この店にやってきたのだ。

「そういや、旦那は1127階に住んでいるんですってっけ？」

キースが住んでいるのはこの階層ではない。そして、明日十数年に一度の階層再編が起こるのだ。

「ああ、これが食いおさめだよ」

もうこのラーメンを食べにくることもできない。何せ、この階層にくる手段は明日には失われてしまうのだから。そのことを考えるとキースの表情は曇っていった。せっかく出会えた最高のラーメンがもう二度とは食えないのだ。

それはキースにとってたまらなく苦痛な事だった。

「そんな顔しないで下さいよ。せっかくのラーメンが不味くなっちゃいますよ」

その通りだ。これが最後なのだ。

最後のラーメンは最高の状態で食べなければ。

「うまいよ」

ラーメンの味が口一杯に広がって行く。この味を忘れまいと、この味を失うまいと絶え間なくラーメンを口に運ぶ。

「うまい」

見る見るうちに丼の中のラーメンは減っていき、やがて最後に僅かなスープが残った。まるで厳粛な儀式が取り行われるかのようにキースは真剣なまなざしでアンディの目を見た。アンディはただ微笑んで頷くだけだった。

キースは丼を持ち挙げ、最後のスープを口の中へと流し込む。

そして、キースは躊躇することなくこう言った。

「ごちそうさま」

探求者 田中・蔵州守・バーナード

我が祖父、3世代前の探求者である田中・E・ウンドゥムスはその生涯に置いて膨大な数のテキスト情報を作成している。Eは探求者の一族において忌むべき神秘科学主義に傾倒した異端の存在として我が一族に名を刻んでいる。そのため、彼が残した膨大なテキスト系情報群は省みられることなく村の情報保管庫の奥で埃を被っていたのである。異端の烙印を押された彼の著作であるが、やや突飛な論旨であるものの興味深い言及を数多く残している。そこで探求者である私は彼の残した膨大な著作を元に新たな世界観システム系を構築したいと思う。

Eは神秘科学主義者として前世代の人間にとってはある程度名を知られているかもしれない。Eのその神秘科学主義者たる所以はその懐疑の精神から来るものである。我々探求者の間では懐疑は必要なものとされているものの、「了解と好意の原理」により行き過ぎた懐疑は禁物とされてる。しかし、Eはあえて自ら科学精神と称したその懐疑の方法論によって全てのものに対して懐疑的に分析した。彼は最終的に疑う事のできぬものなど存在せず、ひとたび疑いをかけられた物は存在を証明することはできぬという結論に達し、以降その不確かな存在を探求することについて悩まされ続けた。そのことについてはこのテキスト情報では多くは語らない。それは忌むべき懐疑精神の行き着いた果てなのだ。

さて、彼が懐疑の対象としたものには「ライノーツの船」がある。我々の階層の空に浮かび、他の階層と我々の階層を繋げているかの船であるが、彼はその存在が果たして本当にライノーツの船であるのか、そもそもあれは船であるのかというところからライノーツの船に関して分析を進めていく。そもそもライノーツの船とは誰が名づけ、いつごろからそう呼ばれているのかははっきりしない。過去の言語系情報を検索してみても下限の窓幕時代にその記述が見られたかと思えば、その後しばらく記述が見られず、しばらくの後の代にひょっこり顔を出したりする。確かに、言語情報で検索できる限りの最初期であるミクロソフィト＝マッキ時代にその記述が見られることからして、それ以前からライノーツの船が存在していた事は確かなようである。しかし、過去の時代において忌まわしい情報改変が行われていた事もあり、これらの記述を鵜呑みにすることはできない。ただ一ついえることは、我々にとって、私が物に触れたり、掴んだりするこの手こそが「手」といえるように、ライノーツの船はライノーツの船なのである。その我々にとって自明の事を、Eは疑った。

ライノーツの船という言葉は、ライノーツと船、そしてそれを接続する「の」によって構成されている。そこでEはこのライノーツと船について探求をする。まず、ライノーツとはなんなのか。ライノーツとは人の名前のようにもあらし、何かの物体の名称であるかのようにも思える。ある

人物が作り上げた船なのか、それともライノーツと呼ばれる物質によって作られた船なのか。ライノーツが指す対象を知りえない限り、この問題を解く事はできない。しかし、この言葉もまた過去の情報にも見出す事のできぬ謎の言葉である。田中・DR・サナギによればライノーツはライノーツの船から分離不可能な言葉であって、ライノーツだけで意味を意味を成さないものであるとしている。これは現在では一族のもの多くに支持されている意見であり、そもそも多くの村人たちはライノーツという言葉はライノーツの船から切り離して考えたりはしない。

そこでEは「船」について探求の矛先を向ける。船とはあの砂原に浮かぶ抜け殻のことを指す。現在では砂原は紫色を呈しているが、かつては青色だったと言われている。そこで移動手段の一つとして用いられていたのが「船」であるというわけだ。現在では砂が青色を失ってしまったためか船はその機能を失い、ただの抜け殻と化している。それが我々の知る所の船である。しかし、ライノーツの船は空に浮かんでいるし、砂漠に佇む船とは全く似ていない。そもそもライノーツの船は数年ごとにその姿を変える。確かに、その形態変化の過程において数年間船に酷似した形をとることもあるであろう。しかしそれだけでは船足りえるとは言えない。それでもライノーツの船は船と呼ばれている。我々はそれを疑おうとはしなかった。ライノーツの船は船なのだ。しかし、Eにとってはライノーツの船は船ではない。いつごろからライノーツの船と呼ばれ、ライノーツの船を船として認識するようになったのか。それはライノーツの船が何かを運んでいるものだからではないかとEは考察する。船は砂原を移動する構造物であると共に人や物を運搬するものであった。ライノーツの船は何かを運んでいる。その何かとは人であるとEは述べる。ライノーツの船はこの階層から別の階層へ人を運んでいるのだ。一見するとライノーツの船は自身は移動もしていないし、確かに他の階層への入り口を構成しているもののそれは運搬とは言いがたい。しかしそれは我々の船に対する認識を誤っていたのだ。砂原に点在する船は人を乗せ、船が移動して運搬するものではないのだ。本来船はライノーツの船のように他の場所へと移動する門を持っていた。そしてそれを通して、現在我々が階層間を移動するように人や物が移動していたのだ。それが、Eの見出した答えである。少々論理の飛躍があり、後にE自身もこの説に懐疑的になり、いくつかの説を提示する。

それはライノーツの船が何らかの物を運んでいるという説である。ライノーツの船には他の民族とは交流を断絶した種族が住んでいるといわれている。彼らは自ら自身を情報へと変換し、その中で過去の世界を再現しているのだという説がある。しかしEの説はこの異説以上に突飛である。その運んでいるものとはこの階層自体であるというのだ。広場の電磁計の表示からして我々の階層は階層再編においても移動していないというのが定説であるのだが、そんな自明の事までEは疑う。Eにとっては電磁計の表示はただ壊れているだけか、もしくは何の意味も成さないものである。そして、電磁計の表示が信用なら無いとなれば、この階層自体が移動しているとしてもなんら不思議ではない。それどころか、Eは放送センターの階層構造という最も自明ともいえる世界観自体を疑っているのである。

現在広く受け入れられている階層構造のモデルとしてはタナカ・鉄火・剛算の提唱した鉄火巻きモデルがある。この高層建築物世界であるされている我々の世界を鉄火巻き型の建築物としたモデルである。鉄火巻きの中心にあるマグロは我々住む1125階層だとしよう。この階層は中心で

あり、動く事が無い。しかし、まわりの酢飯部分は多数の米粒から構成されていてその階層郡は入れ替え可能である。その階層郡は中心であるマグロ部分とは異なり海苔巻きの内においてはランダムに移動する事が可能であり、移動したとしても鉄火巻き足る本質に影響は及ぼさないのである。そして、その階層＝米粒の移動はランダムに行われ、我々にとっての階層再編がそれに当たる。そこで、鉄火は我々に似たようなマグロ部分に当たる固定階層が幾つかあるのではないかと考え、本来米粒部分の階層は固定階層と固定階層の間に存在するようなものだったのではないかと示唆している。このモデルはいくつか問題点を含み後の探求者たちによって様々な変更を加えられ、現在ではより完成度の高いモデルが作られている。鉄火巻きモデルという名がつけられているものの、後の探求者にはあまり相応しい名前とは考えられておらず、現在では「固定階層モデル」や「円筒階層」モデルなど名なの派生モデルが主流となっている。鉄火が鉄火巻きモデルと名づけたのは単に彼が鉄火巻きが好きだったためである。余談だが、彼は屈指の戦闘者や指導者として知られる一方で優秀な探求者でもあった。階層再編の際にそれを観察するためにライノーツの船に乗っていたのだが大規模な形態変異に巻き込まれ行方不明となった。ある人は死んだといっているが、またある人は他の階層へと行ってしまったのだと言う。鉄火は村長と同世代の人物であり、たとえ他の階層で生き延びたとしても現在まで生きているとは思えない。

さて、話が少し横道にそれたがEはこのような階層構造の世界観モデルをとらないことは既に述べた。では、彼はどのような世界観モデルを想像したのか。彼はこの階層自体を他の階層とは独立した世界として考えた。階層は一つの世界＝高層建築物（放送センター）に包括されたものではなくそれぞれ独立した世界であるというのである。当階層と他階層はそもそも次元の異なる世界であって本来同じ世界観を共有した存在ではないとする。Eがその証拠としてあげるのはアカイシア共同体は階層再編を新たなトンネルが出来上がったと表現したし、侵略系においては侵略のために送り込まれたと思い込んでいたことである。彼らは決して階層再編が起こったとは言わなかったのである。我々はそれを表現の違い、もしくは他階層の探求者が間違っただけを見出しているのだと思い込んでいた。しかし、むしろ間違っているのは我々であって彼らの認識の方がより真実に近いのだとEは述べている。さらに、1つの階層はたった四畳半の無人の一部屋だった事もあれば、多くの種族、多くの国家、幾多の大陸と大海を含む広大なまさに世界とも呼ぶべき階層だったこともある。これらは皆階層などではなく、我々の世界とは異なる世界なのだと言うのである。しかし、多少の齟齬はあれど我々は他の階層の種族ともある程度の共通の認識を持って理解しあう事ができる。更に言えばEの挙げた例は特殊な例であり大抵の種族は階層再編の事を階層再編と言って我々と同じ様な世界観に基いて生活している。Eはそれは我々の世界は他の世界へ影響を与える力を持っているためだと説明する。我々の世界は他の世界に接触するとそこに住む人々の認識機構に何らかの影響を与え、彼らの世界に対する見方を変えてしまうというのだ。Eは我々の世界が他の世界に与える影響をストレンジアトラクタと称する。そしてそのストレンジアトラクタは他の世界をこの世界に接触させる力であり、他の世界に突然の変化を与えるのだとする。もちろんこれは侵略系が使っていた「ストレンジアトラクタ」本来の意味ではなくEの作り上げた概念である。一説によれば侵略系がかつてストレンジアトラクタシールドを張っていたという。

Eはこの世界の上位世界は異なる世界を内包しているその数は無限であると考え。そしてその無限の世界との接触は完全にランダムに発生するのだ。しかし、ここで一つの疑問が生じる。無限に異なる世界がありランダムに接触するのならば人間とは全く異なる知的存在のようなものが存在する世界と接触してもおかしくは無いのではないだろうか。しかし、実際には人間か、人間の作った存在か、あるいは無人である階層との接触しか記録には残っていない。

しかし、Eによればそれは我々にとっての可能世界のみと接触を持つことができるためである。ここにダイスがあるとしよう。ダイスは1～6までの目がある。数字は無限にあるがダイスがあらわすことのできるのは6つの数字に過ぎないのである。そして我々の世界は無限の目を持つダイスだが全体の無限から見れば一部でしかないのだ。つまり我々の世界はある特定の世界としか接触を持つ事しかできない。そしてそのダイス、他の世界との接触をランダムに決定する装置こそライノーツの船である。そしてライノーツの船はこの世界自体であって、多次元世界を移動する船なのである。

「おそらく古来ライノーツという言葉は「世界」という意味、もしくはこの世界に与えられた名、さらに想像が許すならばこの世界を作り上げた人物の名なのではないか」

そう述べてEはこの世界への解釈を閉じる。

Eの世界観モデル—多世界モデルでも名づけよう—はただの世界と階層、高層建築物と上位世界の言葉の置き換えに過ぎないのではないかとも思える。これらの言葉を置き換えてみてもそれほど大きな裂け目が生じるわけではない。更に言えば、そこでは従来の階層モデルとEの多世界モデルとの合一がなされ新たなモデルが提示される。元来、我々は階層を三次元的広がりとして捉えてきた。しかしEの提唱したモデルを取り入れることにより多次元的な広がりを考える事ができる。そしてこれを一つの箱＝高層建築物に収めることによって我々にとって自明の知識を歪める必要もなくなる。我々は多次元的な広がりの中の無限の階層（それはもちろん建築物に収めるだけの無限の階層であり、我々の想像を絶するような世界は含まれない）と接触し、階層再編においては文字通り多次元での位置が入れ替わる。このようにして私は新たな世界観モデル、多次元的階層モデルを提唱する。このモデルで考えれば、Eの多世界モデルでは説明の難しい旅人と呼ばれる再編のたびに移動を繰り返すような一族の存在も従来どおり説明が可能である。

Eの残した情報の数々はあまりにも異様なものが多く現在まで省みられる事が無かった。だが、異様に見えるそれも別の視点から見れば軽やかな跳躍であり、自明の事さえも置き去ってしまう雄大な飛行である。しかしEは高く飛びすぎた。あまりにも飛んでいた所が高すぎて我々はEの姿には気付かずに異様な影しか眼にしていなかったのだ。そして高く飛びすぎた彼は道を見失い、やがて飛行は混沌としたものへと変わって行った。

飛行は低ければ意味を成さないが、急激な上昇は身の破滅を招く。探求とは長い時間をかけて徐々にその高く上昇していくものだ。我々は焦らずに高みを目指していかなければならない。

参考情報

- 1) 田中・E・ウンドゥムス 「ライノーツ・船・門」
- 2) 田中・DR・サナギ 「名称情報の起源」
- 2) 田中・E・ウンドゥムス 「階層と世界—多次元構造という世界観—」
- 3) タナカ・鉄火・剛算 「階層構造としての鉄火巻きモデル」
- 4) 田中・シロア 「幽冥郷」
- 5) 田中・E・ウンドゥムス 「侵略系にみる階層の構図」
- 6) 田中・E・ウンドゥムス 「ダイス論的世界再編、もしくはストレンジアトラクタ」

おまけ3：鉄火

鼠色の雲が広大な空を覆いつくし天と地とを遮る。

水蒸気が凍てついた空で冷え、やわらかな雲を紡ぎだしたかと思えば大地を穿つ銃弾となって降り注いだ。

閃光が雲と大地を照らし出し、照らし出されたものは影を伴って存在を顕わにする。

湿った土の臭いが鼻腔をつく。

やがてそれは味気ない雨の匂いへと変わっていき、霧のように辺りを覆いつくし湿気の底へと沈めて行く。

暗い世界。

淀んだ世界。

そんな淀みをどこかへ洗い流してしまうかのように冷たい風がゆっくりと流れを作る。風の流れの中で木々はさざざと雑談をはじめ、かたや鳥たちは沈黙を守る。

ざわめきと沈黙。

ノイズ混じりの静けさ。

それはこれから何が始まるのか期待する劇場に集まった観客たちの放つものなのかもしれない。

やがて劇の主演となるべき男がひとり、やって来る。雨に濡れながらも毅然とし、淀んだ気配もそよぐ風もまるで気にかけていない。

男の前方には稲光に照らし出されたもう一人の主演。それもまたその場の状況などは胸中に無い。あるのはただ、目の前にある好敵手のみ。一對の影はゆるりと距離を詰めるとやがて止まった。まるでそれが予め指定された立ち位置であるかのように微動だにせず、ただ相手を一心に見詰めるばかりである。2人の戦士は戦いの鐘が打ち鳴らされるのを待ち構えていた。そこには鐘を打つ者などいない。2人の戦いの場に入り込めるものなど誰一人としていなかった。だがやがて鐘は打ち鳴らされるのだ。2人の間に流れる均衡。それが打ち破られるとき二人の胸中には何かが到来し、鐘を打つ。

男の肩が揺れたとき、鐘が鳴った。

男は肩の傾いた方向に重心を寄せそのまま横に走り出す。もう一方の存在もまたそれに呼応するかのように反対側へと素早く移動する。2つの影は円を描くかのように動く。男が足を地面につけるたびに水しぶきが飛び上がり音を立て、存在もまた浮遊装置の反作用によって雨や草を切り裂いてゆく。

閃光。

光が世界を包んだ瞬間、戦闘存在の触手が男の心臓めがけ打ち出される。男の眼前に迫ろうかという刹那、触手は刀に弾かれ行き先を見失う。遅れて金属音が響いたときには男は既に姿勢を屈め走り出していた。

疾風迅雷。

疾風の如き速度で距離を縮め、迅雷の如く空を裂く。存在はすぐさま二弾、三弾と続けざまに触手を発射する。男は体制を崩すことなく抜刀し弾道を逸らす。触手は方向を見失いかつて男があ

った場所を漂ったかと思えばすぐさま男の背後へ迫りくる。

減速の過程など無き、一瞬の静止。抜刀。

男の急激な転換によって形成された水しぶきの壁を越え弾丸の速度に達した触手が到来する。二弾目を受け止めた瞬間新たな触手が背後の存在より打ち出される。小さな舌打と壁の中の影が打ち抜かれたと思われたときには男は宙へと飛び上がっていた。

存在が再び男の存在を認識した瞬間には男は既に切っ先を存在に向け空を蹴って落下してきていた。

触手が反射的に存在を覆う。

刃は存在に達することなく一本の触手を切り裂いたのみだった。次の瞬間には触手たちが身をしなければ男を弾き飛ばす。空へと投げ出された男は体制を入れかえとんぼ返りして再び足に地面の感触を味わう。再び立ち上がろうとするも足に激痛が走り膝をついて崩れる。これを好機と見た存在は再び触手を打ち出そうとしたが指令は神経コードの末端に達し、其処で途切れた。存在はすぐさま触覚情報と光学情報を検索し触手が無残に切断され紫色の体液を垂れ流しながらだらしなく伸び上がっていることを認識する。再構成している暇など無い。存在はすぐさま戦闘装備を切り替えると男も神経を集中し激痛を忘却の彼方へと追いやる。

男は流れるような動作で正眼に構えた。

男の背後で雷鳴が響き、閃光が2つの影を浮かび上がらせる。

存在は光電子ブレードを下段に構え、全ての感覚装置を限界まで高める。

高められた二人の感覚が極限まで達した瞬間、何もかもが静止した。

雨も風も、音も光も。

やがて

それらは

ゆっくりと

変化を取り戻し、

再び動き始める。

全てが時間を取り戻した刹那、二つな影が交錯した。

男は盛り上がった土の上に刀を突き刺し、手を合わせた。

幾度も戦った好敵手を討ったその手を合わせ男は祈った。男は何を祈っているのか良くわからなかった。死後の冥福？良い輪廻に巡り会えるように？そのような願いなど果たしてこの好敵手に必要なものなのだろうか。男の祈りは好敵手への感謝の表れだったのかもしれない。

階層再編に伴い、侵略系の軍勢は引き上げて行ったのだがこの戦闘存在だけはこの階層に残った。男と決着をつけるために。

戦闘存在に過ぎないその存在が意思など持つはず無かったのだが、戦闘において致命的なエラー

が発生してしまったためかいつしか男を自らの好敵手と定め、幾度も戦いを挑んでいた。そして階層再編の情報を与えられていなかったにもかかわらず、何かを察知しこの階層へと残った。存在は単純な戦闘だけではない、何か別の存在意義を見つけたのかもしれない。それはある種の友情に似たものだったのではないだろうか。そして男はそれに答えた。

男と戦闘存在はライバルであり、友であった。言葉は一度も交えなかったが、それでも戦いを通して分かり合えた気がした。

戦闘者でもあり、探求者でもあった男はそんなことを考えながら空を見上げる。

空は青く、晴れ渡っていた。

「師匠」

村長の娘がやってきて男の横に座る。娘は何故か許嫁である筈の男の事を師匠と呼び慕っていた。男もまた5つほど歳が離れていたせいか娘を妹のように可愛がり、時には弟子のように様々なことを教えていた。

「食うか？」

男は懐取り出した包みを開け、鉄火巻きを娘に与えた。男はおいしそうに鉄火巻きを頬張る娘の頭を撫でてやった。

「やめてくださいよお」

娘は子供のように扱われるのが不満なようで頬を膨らませて男の腕を振り払おうとする。

そんな二人を見守るように、空にはライノーツの船がゆったりと浮かんでいた。

この短編はTexpoで企画された鉄火場大賞に参加した時の作品です。

確かお題は「カバ」「鉄火巻き」「NHK」。

漫画「BLAME！」とSFマガジン2007年8月号掲載の短編「夜明け、夕焼け、大地の色」に触発されて書きました。前者は超高層の建築物と交流の断絶された階層に住む人々のことあたりを触発されました。後者の方は大型客船が謎の現象によって消失してしまい残された人々を描いている作品です。この作品は残された人々の名前をタイトルにしてそれぞれの視点に立った小話幾つか組み合わせています。この短編もその影響を受けて様々な人々の視点に立った物語を組み合わせた構成になっています。

書き始めていた当初考えていた章の構想は以下のようなものです。

田中

探求者の家系に属する。階層再編について探求。

ケムリ

手牟族の娘FAMEと恋仲。

さざめ

親友との別れ。清々しく。

GdNA

報道者。再編後、他の階層へ電波を送り続ける。他の階層に残った娘と妻へのメッセージ。

それがいつの間にかこんなお話になってしまいましたが、今思えば最初の構想の方が面白かったかなあとも思います。

最後に個別の作品について少々（少しネタバレあり）

ライノーツの船

本当は哲学のたとえ話に出てくるノイラート船を使おうと思っていたのですが、勘違いでライノーツの船に。ゲルモと平行して書いていて、特に何も考えずに書いていた感があります。

ゲルモ

世界観の説明といった部分。何か書いてる本人も良くわかってない世界観を適当に書いていたため後で無理やり辻褄をあわせてます。これを書いている途中に階層再編のアイデアが浮かびました。そっちがメインになってしまったため、以降タイトルのライノーツの船は無理やり出して

ます。

ケムリ

他のと平行して書いていたのですがさざめと村長が男女の別れのエピソードになってしまったので当初の構想を変更して父と子の別れを書いてみました。あと、とりあえず別の作品で出した手牟族を出してみたかった。

さざめ

親友とのわかれっつーことで普通に書こうと思ったのですが大抵の男女の別れが恋愛がらみなのが気に入らないので男と女の親友を書いてみました。今読み返してみると友達以上恋人未満のような感じです。

村長

もっとお題を活かさなきゃって事とせっかく表紙でふざけたから村長メインの話も書いてみようって事で書いたもの。テキスポでの公開当初は何故か一番評価されているような気がする。

NHK3号

一応まとめって感じで。階層再編の数年後を書いてみた感じです。

おまけについても

キース

なんかもっと平凡な別れがあっても良いよなってことで書きました。食べ物の表現って難しいけど何か楽しいなっておもいました。

田中

とりあえず作った世界観をぶち壊してやろうということで書いたものです。論考風味。でも、ぐちゃぐちゃ。

鉄火

ライバルとの別れって事で戦闘シーンを書いてみたかったのです。一応過去編的な感じで、後半蛇足です。村長出てきてるような、出て来てないような。